

# サハリン（樺太）探訪記

ボーダーフォトグラファー 斉藤マサヨシ

## 北知床岬を訪ねる(1)

＝北知床岬を目指して＝

北知床岬は本当に真の地の果てであった。

かつて日本には三つの地の果てがあった。

一つは北海道知床岬

二つ目は樺太アニワ湾東側の中知床岬（アニワ岬）

三つ目が樺太タライカ湾東側の北知床岬（チェルペニア岬）

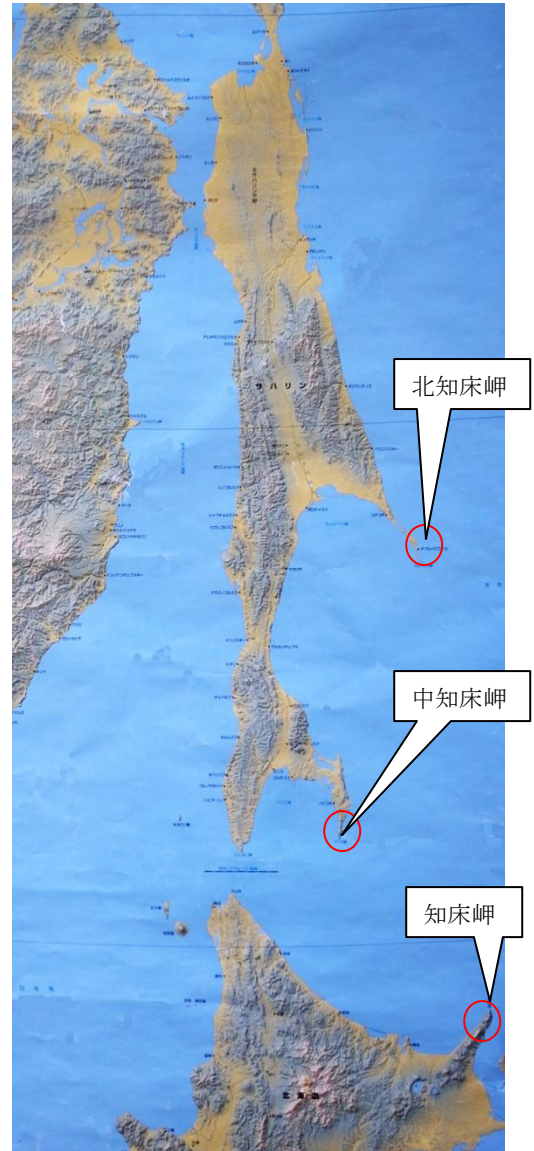
北知床岬は真の知床と呼ばれていた地の果てである。私は真の地の果てを見たい、体感したいとの思いで、かつて樺太と呼ばれたサハリンを訪ねることにした。

サハリンの北緯 50 度線以南は 1905 年から 1945 年まで日本の領土であった。この南樺太には約 40 万人の日本人が暮らしていた。もちろん北知床岬は日本領であり、日本の灯台があった。今もこの灯台が残っているのかを自分の目で確かめるのが第一の目的である。

2018 年 9 月 17 日、新千歳空港からオーロラ航空でユジノサハリンスク空港に到着。ユジノサハリンスク市内で一泊。ユジノサハリンスク市は樺太時代の豊原市で、街区が碁盤の目のようになっていて、歩き易い街である。

翌 18 日ユジノサハリンスクからポロナイスクまで 290km 車で北上する。道路は完全舗装で快適なドライブが楽しめる。ユジノサハリンスクを出発して 50 分ほどで、宮沢賢治ゆかりの栄浜からオホーツク海に出る。銀河鉄道のモデルになったといわれる白鳥湖を通して、オホーツク海を右手に見て北上する。1 時間ほど走ると海岸沿いの小高い丘の中腹に神社の鳥居が立っている。東白浦神社跡に残された鳥居だ。日本時代は漁師町として賑わった所として当時の絵葉書が残っている。今はヴズモーリエといって、駅前にはカニ売りの露天が立ち並ぶことで有名だ。タラバガニが 1 匹 500 ルーブルから 1500 ルーブルぐらいで売られている。

ヴズモーリエからは峠道に入る。正面に美しい突阻山が見える。しばらく走るとオホーツク海に出た。樺太時代の元泊である。元泊の海岸線は岩礁が見られて美しい景観である。左手には海岸に迫るように山が連なっている。その中に円錐形に整った山が三つ並んで見



える場所がある。樺太時代の「三ツ富士」と呼ばれていた連山だ。

秋晴れのオホーツク海はとにかく気持ちがいい。道路沿いには既に立ち枯れたエゾニウヤシシウドがオブジェのように林立している。ハマナスの赤い実だけが目立っている。マカロフ（日本時代の知取）近くのカフェ（軽食堂）で軽食を取ることにした。チャイ（紅茶）とチェヴィリョーク（ひき肉を小麦粉で包んで焼いた三角形の食べ物）を食べる。

マカロフからさらに北上、夕映えのポロナイスクに到着した。ポロナイスクは樺太時代は敷香と呼ばれた。敷香は当時人口が 3 万人を超える大きな町であった。街には王子製紙の敷香工場があって、今も巨大な煙突や工場の建物群が残されている。敷香は大横綱大鵬の出身地である。大鵬は日本人の母とウクライナ人の父との三男として 1940 年 5 月に樺太で生まれた。今、父の家があった同じ場所に銅像が立っている。

9 月 19 日早朝、ポロナイスクのホテルで今回の北知床岬への旅行を案内していただくポロナイスク管区自然保護官のラヴィーリさんと奥さんのオリガさんと対面する。旅の一行は私と樺太の歴史を調べている I さん、通訳のインナさん、各種の許可手続きをしてくれたキリュウさん、そしてラヴィーリさんの知人でモスクワから来たというビクトルさんの 7 人である。

#### ＝マフィアの道＝

私たちは四輪駆動車にぎゅうぎゅう詰めになってポロナイスクを出発した。樺太時代にはタライカ湾の海岸沿いに北知床岬までの道があったが、今は途中の橋が倒壊して通行できない。私たちは内陸の山越えをしてオホーツク海に出てから海岸を走って北知床岬を目指すことになる。

まずはパベジノ（樺太時代の古屯）まで北上する。古屯は北緯 50 度旧国境線に近い町で、当時は鉄道の日本最北の古屯駅があった。また、旧日本軍の最前線基地でもあった。古屯駅から東側に進路をとる。道路沿いには旧日本軍の軍用鉄道跡がある。川には鉄橋が残っている。この鉄道は古屯と雁門間に施設されていて、軍用の木材や石炭を運ぶためのもので当然地図には掲載されていない。

私たちはかなりの奥地の山道を走っている。サハリンの 10 万分の 1 の詳細な地図が手元にあるが道路は載っていない。ラヴィーリさんに聞くと、この道はユジノサハリンスク市内にいるマフィアのボスが造った私道とのものであった。マフィアのボスはこの辺一帯の森林の伐採権と川でのサケの捕獲権を持っていて、これらを運搬するための道路である。

道路には所々にマフィアのボスの検問所がある。検問所には明らかにロシア人ではない屈強な男が見張っている。最初の検問所にいたのはタジキスタン人の男で、



マフィアの検問所前に立つ私

5月から10月まで検問所横にあるトレーラーを改造した小屋で自炊しているとのことであった。男はタジキスタンに妻と子供が二人いる。二人目の子供は8月に生まれたばかりで、早くタジキスタンに帰って顔を見たいと話していた。ラヴィーリさんは彼にコーヒーとオリガさん手作りのパンを振る舞った。もちろん検問所は顔パスである。次の検問所にいたのはチェチェン人らしき男で、顔に生々しい殴られた傷跡が残っていた。ラヴィーリさんはもちろんここも顔パスである。マフィアのボスがタジキスタン人やチェチェン人を雇うのは彼らはロシア人に強い敵対心があり、サケなどを密漁しようとロシア人を完全にシャットアウトするためとのことである。検問所の小屋を覗いたら銃が置かれていた。まさに無法地帯である。

ポロナイスクを出発してから6時間、オホーツク海に面したドルゴエに着いた。ドルゴエは樺太時代の床呂で小さな湖がある。ここにラヴィーリさんのキャンプ場がある。ここで昼食をとることにした。昼食はパンとカラフトマスのウハー（魚のスープ）。私たちは1時間ほど休息した。

#### =北知床岬への道=

ドルゴエから先に道は無い。ここでバギー用の太いタイヤを装着した三菱のジープ2台に分乗して出発。ここから北知床岬まで海岸線をジープで走る。ラヴィーリさんの説明では、半島全体の約56000haが自然保護区になっているため、人は住んでいないとのことである。この住人は熊、トナカイ、クロテン、キツネ、タヌキ、そしてクズリなどだ。ラヴィーリさんは常に助手席にライフル銃を置いて備えている。



北知床岬を目指して海岸線を走るジープ

最初はオフロードを楽しんでいたが、1時間もすると背中、腰、お尻が激しい揺れに悲鳴を上げ始めた。辺りの美しい風景を楽しむ余裕すら無い。ジープの手すりを握る手には汗が滲んできた。ラヴィーリさんに聞くと北知床岬の先端まであと4時間ほどかかるとのことであった。これはただただ我慢するしかない。北知床岬はロシア語でチェルペニア岬。意味は「忍耐」、なるほど我慢岬である。

## ＝北知床岬灯台＝

ポロナイスクを出発して約 12 時間、ついに北知床岬に到着した。そこには夕陽を浴びた北知床岬灯台が凜として立っていた。ラヴィーリさんにありがとうとお礼を言うと、天候が良く順調に走ることができて予定より早く着いたとのことであった。天候状態では途中で 1 泊することもあるとの話である。私は胸をなでおろした。

北知床岬の先端は高さ 40m ほどの切り立った崖になっている。海岸線はほとんどない。ラヴィーリさんの説明では、崖は海鳥たちの楽園になっていて、今はカモメたちが休んでいるが、6 月から 7 月ごろにはオロロン鳥が子育てするコロニーになるとのことだ。海には大きく突き立った

岩が二つあってシンボルになっている。岬の先端近くに木製の 143 段の階段があつて、登り切るとガンコウランの平原が広がっている。そこに日本が造った北知床岬灯台があつた。近くに銘



北知床岬の先端とシンボルの二つ岩

板の一部が残されていた。「北知床岬燈臺 昭和拾貳年八月建之 ○○省 上野定次郎」

今、この灯台は使われていない。灯台の中に入ると鉄錆びた螺旋階段が上に延びていた。ラヴィーリさんがガンコウランの黒い実を摘んでくれた。口にいれると甘酸っぱさとほろ苦さが広がった。

私たちは北知床岬にあるラヴィーリさんのゲストハウスに寝泊まりして 3 日間滞在することにした。次の日からラヴィーリさんの案内で、北知床岬に残された旧日本軍のトーチカや樺太時代のカニ工場の跡、そしてボートで 17km ほど沖合にある海鳥と海獣たちの楽園チュレニー島（海豹島）などを見ることにした。



北知床岬灯台



北知床岬灯台の銘板